

主体的・対話的な深い学びと科目間連携～「世界史」を例に～

北海道伊達緑丘高等学校地理歴史科 (文責: 寺沢英幸)

日時/平成28年11月25日(金) 会場/北海道伊達緑丘高等学校視聴覚教室



1 地理歴史科における課題

～本校生徒のアンケート調査などを例に～

本校(北海道伊達緑丘高等学校)は4間口の中規模校であり、学習面については、決して低い学力層ではないものの、全体として労苦を避けたがる傾向が強く、向上心をもって高い目標にチャレンジしようとする意欲にもやや物足りなさを感じられる。生徒の学力差が大きく、教師から指示されたことには素直に取り組むが、自ら意欲的かつ能動的に学ぶ姿勢が十分とはいえない。それは多くの学校に共通する「悩み」ではなかろうか。あるいは進学トップクラス校のような偏差値の高い生徒層であっても、記憶された知識量はたしかに多いかもしれないが、果たして生徒たちが話し合ったり、創造したりする活動が十分に行われているだろうか。

はじめに、平成28年5月、1・2学年の全生徒を対象に実施した本校独自の「地理歴史科 学習・授業アンケート調査」などをもとに、地理歴史・公民科における学習・授業の課題について見い出したい。

(1)「北海道学力等実態調査」の結果より

◇入学前との意欲の変化

	高校入学前に比べ学習意欲が高まった	高校入学前に比べ授業以外の学習時間が増えた
全道	66.7%	57.0%
本校	46.5%	36.8%

◇平日の家庭学習時間(家庭学習には読書も含まれる)

	ほとんどしていない	1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上
全道	28.4%	40.8%	20.9%	9.8%
本校	49.0%	37.4%	9.7%	3.8%

◇地理歴史・公民の勉強が好きだ

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
全道	23.1%	33.3%	28.0%	15.6%
本校	25.2%	37.4%	18.1%	18.7%

◇地理歴史・公民の授業の内容はよく分かる

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
全道	21.0%	44.6%	25.7%	8.8%
本校	18.7%	46.5%	26.5%	7.1%

(2) 生徒の学習動機と学習方法についての意識

(本校実施「アンケート調査」結果より)

学習動機の類型

- A 充実志向 (学習の楽しさを味わうため)
- B 訓練志向 (知力を鍛えるため)
- C 実用志向 (仕事や生活に活かすため)
- D 関係志向 (他者との関係のため)
- E 自尊志向 (プライドや競争心のため)
- F 報酬志向 (外からの報酬を得るため)

(市川伸一『学ぶ意欲の心理学』2001年より)

◇学習動機の順位付け

問 あなたは“どんなとき”に「学習の充実感や満足感」を得ることができますか。次のA～Fの項目について、満足度の高い順から並べてください。

- A 新しい知識や技能を身に付けたとき
- B 難しい問題が解けるようになったとき
- C 学習で得られた知識や技能を活用したり、何かの役に立ったとき
- D 良い先生や友だちといっしょに学んだとき
- E 親や先生にほめてもらったり、友だちからすごいねなどと言われたとき
- F テストや模擬試験などで良い点数を取ったとき

第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	第6位
F (報酬)	B (訓練)	E (自尊)	C (実用)	D (関係)	A (充実)

学習方法の類型

- A 失敗に対する柔軟性 (失敗を恐れずに成長・改善しようとする)
- B 思考過程の重視 (正解よりも考え方を大切にしている)
- C 方略志向 (学習の仕方を工夫しようとしている)
- D 意味理解志向 (丸暗記ではなく意味の理解を大切にする)

(市川伸一『学ぶ意欲の心理学』2001年より)

《失敗に対する柔軟性》

◇思い通りにならないときがんばって努力してみようとするほうだ

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
17%	44%	22%	14%	3%

◇うまくいきそうにないと感じるとやる気がなくなってしまう

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
32%	41%	14%	8%	5%

《思考過程の重視》

◇テストでは途中過程よりも答えが合っていたかどうかは気になる

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
34%	30%	24%	10%	2%

◇正解のない問題や課題に取り組むことは無意味だと感じる

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
17%	20%	39%	19%	5%

《方略志向》

◇勉強時間（量）よりも勉強方法（質）のほうが重要だと思う

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
46%	29%	20%	4%	1%

◇勉強のしかたをいろいろ工夫してみるのが好きだ

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
11%	18%	42%	20%	9%

《意味理解志向》

◇なぜそうなるかはあまり考えず答えを暗記してしまうことが多い

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
13%	21%	31%	22%	13%

◇図や表で整理しながら勉強するようにしている

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
10%	25%	33%	20%	10%

◇習ったことどうしの関連をつかむようにしている

そう思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
6%	30%	39%	20%	10%

(3) 「地理歴史科」の教育課程（カリキュラム） や授業等に対する生徒の意識

《世界史について》

◇「世界史」は全員必修とすべきである

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
13%	25%	30%	23%

◇「世界史」を学ぶことは好きだ

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
12%	28%	37%	21%

◇「世界史」を学ぶことは将来の仕事や生活に役立つと思う

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
5%	17%	51%	26%

◇好きか嫌いにかかわらず「世界史」を学ぶことは大切だと思う

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
14%	49%	26%	10%

《日本史について》

◇「日本史」は全員必修とすべきである

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
22%	38%	25%	16%

◇「日本史」を学ぶことは好きだ

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
23%	35%	26%	15%

◇「日本史」を学ぶことは将来の仕事や生活に役立つと思う

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
12%	31%	40%	16%

◇好きか嫌いにかかわらず「日本史」を学ぶことは大切だと思う

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
20%	50%	22%	8%

《地理について》

◇「地理」は全員必修とすべきである

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わない	そう思わない
12%	43%	29%	16%

◇「地理」を学ぶことは好きだ

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
13%	30%	37%	19%

◇「地理」を学ぶことは将来の仕事や生活に役立つと思う

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
14%	47%	26%	11%

◇好きか嫌いにかかわらず「地理」を学ぶことは大切だと思う

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
20%	56%	17%	9%

《歴史と地理との関連について》

◇高校では「世界史」「日本史」「地理」のすべてを学ぶべきである

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
8%	23%	48%	21%

◇「歴史」をくわしく学ぶことも「地理」をくわしく学ぶこともどちらも大切だ

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
25%	50%	19%	6%

◇「世界史」と「日本史」との関連（つながり）を学ぶことは大切だと思う

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
26%	50%	16%	7%

◇「世界史」や「日本史」の授業のなかで、地図を参照するなど地理的条件や自然環境などに目を向けることは大切だと思う

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
24%	56%	13%	7%

◇「地理」の授業のなかで、その国や地域の歴史にも目を向けることは大切だと思う

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
27%	50%	15%	7%

《地理歴史・公民科における授業スタイルに対する生徒の意識～授業に求めること～》

◇あなたがこれまで受けてきた地歴・公民科（中学校社会科）の授業において、ペアワークやグループ学習、話し合いや発表をしたことがありますか

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
5%	47%	32%	15%

◇受験を意識して、教科書の内容をすみずみまできちんと消化してほしい

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
24%	44%	28%	3%

◇できるだけ生徒の発言を取り入れて、活気のある授業にしてほしい

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22%	41%	30%	6%

◇グループ学習やペアワークなどの時間を積極的に取り入れてほしい

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
23%	25%	50%	11%

◇騒がしくなるのは苦痛なので、講義中心でよいから静かな環境で授業を受けたい

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
6%	23%	44%	27%

(4) 課題の明確化

以上のとおり、本校「地理歴史科」における生徒の意識や学力について、アンケートなどから検証してきた。これをもとに、あらためて本校生徒の実態と課題（多くの学校に共通する）について整理すると、次のようにまとめられる。

○「テストで高得点を取る（良い評価や成績を得る）」や「受験のため」といった目先の外発的動機に基づく学習志向が強く、現代世界に対する課題意識を高めて追究したり、新しい知識を得て活用したりしようとする意欲に乏しい。

○生徒の学習が「用語を覚えること」でとどまっており、社会的事象の意味や意義、概念等を十分に捉えているとは言い難い。

○知識を活用したり、諸資料からの情報を読解したりする力、思考力・判断力・表現力等が十分ではない。

○とくに「世界史」に対する苦手意識が強く、学習意欲や学習事項の定着度が「日本史」や「地理」に比べて低い。

○これまでの「地理歴史科」の授業では、科目相互の連携が不十分であり、1年次の「世界史」で学んだことを2年次の「日本史」や「地理」に活かしたり、1年次の「世界史」において自

然環境とのかかわりや日本史との関連から考察したりするなどの場面が少ない。

- 主体的に学習する意欲や態度を高めさせる（家庭での学習習慣、主体的・協働的な学習や言語活動の充実を図るなどの授業改善）必要がある。

2 課題解決に向けた取組～科目間連携～

(1) 科目間連携（地理歴史）の視点

本校は、平成28・29年度の2カ年において、国立教育政策研究所「教育課程研究指定校事業」地理歴史科の研究に取り組んでいるところである。前述の実態と課題を踏まえ、本校が設定した研究主題および研究仮説は次のとおりである。

地理歴史科（世界史・日本史・地理）における科目相互の連携を図った授業実践の研究

《研究仮説》地理歴史科（世界史・日本史・地理）における科目相互の連携を図り、社会的事象の意味や意義、概念等を他科目と関連付けて総合的に捉えさせることで、地理歴史についての学習意欲や学力をより向上させることができるのではないかと。

上記の研究主題のもと、本研究では、各科目で習得した知識や概念を活用したり、科目相互の関連性を踏まえて考察したりする学習活動を通して、歴史的な見方や考え方、地理的な見方や考え方を育成するとともに、生徒の学習意欲を向上させ、思考力・判断力・表現力等を高めさせることをねらいとしている。キーワードとなるのは、なんといっても地理歴史科における“科目間連携”である。

科目間連携についてはさまざまなあり方や方法が考えられる。そのいくつかの視点を次に示す。

科目間連携（地理歴史）の視点（例）

- ①各科目（世界史・日本史・地理）での軸となる学習内容に他科目の要素（エッセンス）を加え、多面的・多角的に考察を深める。簡単にいえば、関係や結びつき（接点）に触れ、時代を経るとともに世界が一体化していく過程をつかむ。時間軸と空間軸の概念。

例）東アジアの冊封体制、イラン文化と正倉院宝物、マルコ＝ポーロ、イエズス会によるカトリック布教……（さまざま）

- ②各科目で学習したこと（知識や見方）を活用して考察したり、教え合ったりする。

例）「なぜ東南アジアでは国家間の経済格差が広がっているのか」について、地理的条件と歴史的背景の両面から考察する。

その際、グループワークとして「地理」を履修した生徒に地理的条件を調べさせ、同様に「世界史」を履修した生徒に歴史的背景を調べさせ、相互に教え合って（ジグソー法やロールプレイ等）課題の解決に向かう。（※長崎県立佐世保北高校の実践より）

- ③社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連から、現代的な諸課題の解決（よりよい社会の実現に向けた世界や日本の在り方）について構想する。

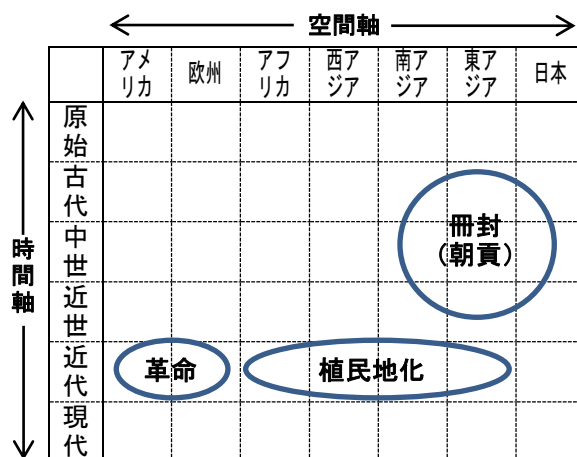
例）資本主義は持続可能な経済といえるだろうか。その解決にはどうしたらよいか。

(2) 「世界史」と「日本史」による科目間連携～新科目「歴史総合(仮)」の授業デザイン～

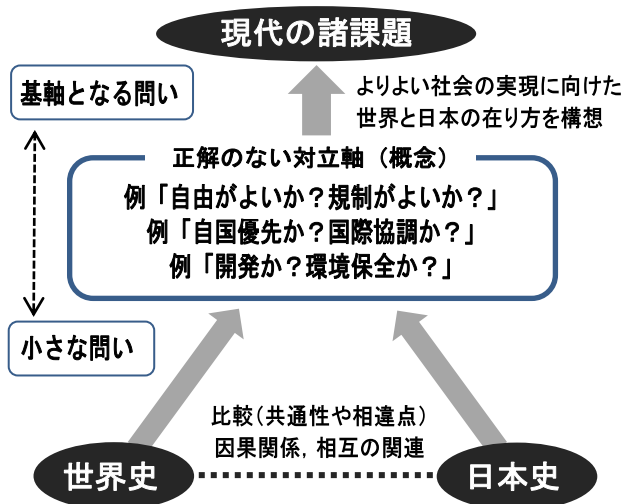
高等学校学習指導要領・地理歴史科の次期改訂に向けては、「世界史」「日本史」「地理」を柱としてきた従前の枠組みが、大きく変わろうとしている。なかでも改訂の大きな目玉の一つとなっているのが、新科目「歴史総合(仮称)」である。

これまでの歴史科目は、例えば「中世ヨーロッパ世界」や「18世紀以降におけるアジア・アフリカの植民地化」といったように【時間軸】と【空間軸】を基本に、その時代と地域の特色や概要（あるいは発展の過程）をつかむ内容構成であった。

▼これまでの歴史科目（時間軸と空間軸）寺沢作図

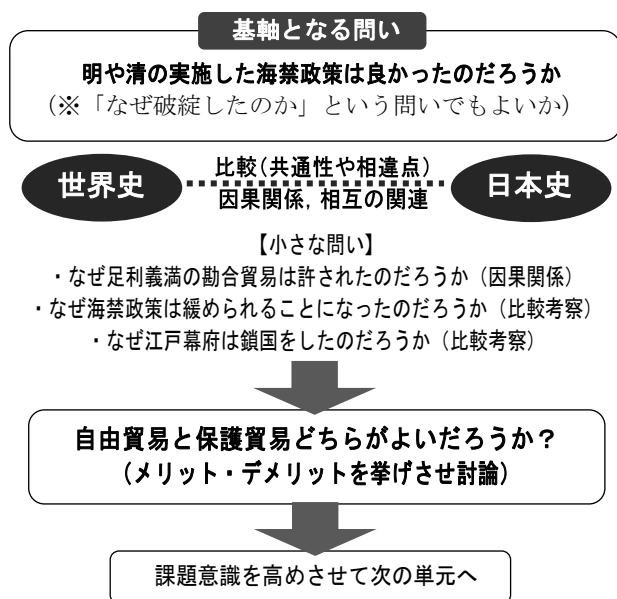


現行の「世界史A」と「日本史A」を相互に関連付けて統合・発展させた、近現代史を中心とする「歴史総合」は、時代ごとに地域別の歴史を順に概観していくというよりは、現代的な諸課題にもつながる対立軸（概念）を取り上げ、日本を含む世界各国の歴史を比較しながら考察し、その対立軸が形成された歴史の過程を把握するとともに、解決に向けて構想したりする力を育てようとするものである。



そうした新たな歴史科目の授業デザインを模索しつつ、具体的には「世界史A」において次のような単元構成（年間指導計画については見直しを図りながら進めている）のもとで、実践と検証をくり返しているところである。

▼単元の構成（寺沢が実践している一例）



各単元では、現代的な諸課題にもつながる「基軸となる問い（対立軸）」を設定し、その課題が形成されていく歴史的過程や背景を「世界史」と「日本史」との比較や因果関係などをもとに把握していく。そのなかで自分なりの考えをもち、他者との意見交流（合意形成）を図ることで、正解のない課題への解決に向けて創造的思考をはたらかせていくことができれば、より深い「歴史」の学びになるのではないかと考えられる。その学びの手段として有効となるのは、もちろん一斉授業による講義形式（チョーク&トーク）ではなく、言語活動や教え合いなどを通じた能動的学習である。

3 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）や言語活動等の充実

最近「アクティブ・ラーニング」という言葉ばかりが先行し、グループ学習やペアワーク等の手法的側面に目が行きがちである。何がアクティブで、何がアクティブでないか——その定義づけも難しく、そうした論議（区別）をすることに果たして意味があるのか、私としては疑問も感じている。

とはいえ、一斉授業による講義形式（チョーク&トーク）ばかりでは、やはり生徒は受け身になってしまう。しかも教師が説明したり黒板にまとめたりしていることは、教科書や指導書・参考書などの丸写しであることが多い。もちろん生徒の実態や日々の心境・モチベーションの変化（生徒は授業だけではなく人間関係をはじめ様々な悩みを抱えている）にもよるだろうが、私は「あれもこれも」教えたりせず、基本的には生徒に調べさせる。いかにして教師が“教えない勇気”を持つかである。教師はあくまで「場」や「問い」を設定し、知識を入れたり、議論したりするのは生徒が主体である。私が授業においてこだわりたいのは、次の点である。

考える ⇒ 考え抜く } ※思考・判断・表現力
悩む ⇒ 悩み抜く }

その過程に生じる「投げ出したい」「めんどくさい」「あきらめたい」「楽したい」…といった衝動にいかに打ち勝つか。

⇒ 主体性・協働性＝厳しい社会を生き抜く力

このような授業に取り組むためには、生徒にも教師にも時として失敗や挫折（うまくいかない）が伴う。さらには地歴公民科の特性として、思考したり、課題を解決したりするには“知識の習得”や“考える時間”をそれなりに保証することも必要である。

いずれにしても、こうした「アクティブ」の授業を思いつきや気まぐれで取り入れるのではなく、年間計画や単元の指導計画をとおして段階的に発展させていくこと（スモールステップアップ）が望ましい。むろんいきなり生徒に高度な発問や議論を持ちかけても、すぐに「ムリ！」と心離れしてしまう。そのバランスは本当に難しく、教師側の理想と生徒の実態とが合致しないことは多々ある。

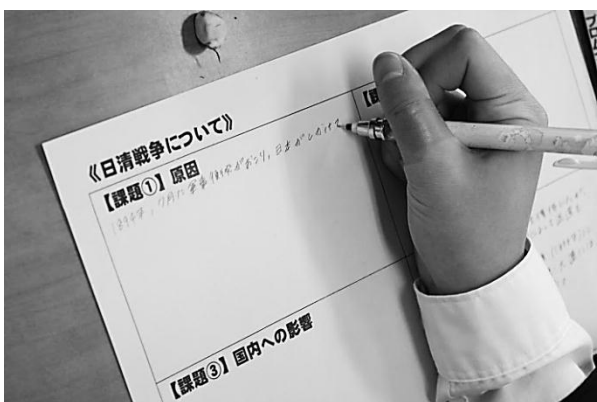
まずは「教科書・資料集レベルで調べたことをシェアさせる」など、簡単なことからスタートしてみてもどうか。年間授業の半分以上を「アクティブ」にする必要はないし、教師自身が過度な準備負担やストレスを抱えてもよくない。新しいことを始める

というよりは、これまで実践していることであるとの認識をもつことが大切であろう。

活動例① ペアで課題に取り組む



活動例② グループ内でシェアする



活動例③ グループで話し合ったことを全体に発表する



活動例④ 他のグループに伝えに行く



活動例⑤ グループでプレゼンテーション活動



おわりに

地理歴史に限らず、生徒は安易に「答え」を求めようとし、それを暗記することによって良い成果（成績評価・大学合格…）が得られるものと捉えている。とはいえ、昨今の大学入試改革や学習指導要領の改訂はもちろん、変化の激しい現代社会において山積する課題に向き合い、解決し、他者と協働しながら「生き抜く力」を培っていかなくてはならないことを見据えれば、そのような意識だけでは全く通用しないことが明白である。積極的に授業・評価の改善を図り、簡単に答えや正解が導けない課題の探究に対する学習の意義を捉えさせ、その学習意欲を高めさせること、社会的事象についての多様な見方や考え方を育成していきたい。